

に依りて源を以て辿らねばならぬ宗教である。

洛東善氣山下、臘月上九日、末代沙門舜道謹むで有信の人に白す。

## 讚頌哲學

——(ウイリアム氏印度教第二章)——

前田 聽 瑞

吠陀の意義

吠陀(Veda)——知識を意味する——といふ言葉は不文の聖智(divine

awritten knowledge)に適用された文字である。而して吠陀は梵(Brahman)といふ自存の實體から氣息の如く吐き出されたものだと思像せられ、又それ自身自存であるとも考へられてゐる。だから、吠陀はそれ自身度々梵と呼ばれる。そうして、その梵なる言葉は「宇宙遍在の本體」か、さもなければ「人心に透徹せる信仰の精神」とか「靈的聖者」とかを意味するものなのであらう。

(私註) 支那ではベダを毗陀、皮陀、韋陀、園陀、鞞陀、辟陀、吠陀或は波陀など音譯し、智論又は明論とも翻してゐる。

口誦傳持の吠陀

この聖者は又シヤブタ(Sabota)即ち聲——永久的なものだと

考へられてゐる——と結び付けられてゐる。それがためにこの聖者は時にはリシ (Rishis) と呼ばれる聖者に依つて聞かれた永恆不變の聲だと考へられた。時には又聽かれるのみならず實際彼等リシに依つて見られる永遠の言葉だと考へられたこともある。

(原著者註) 後世、(Rishi) リシはドリス (Dris) 即ち「見る」といふ語根から轉化したドリシ (Drishti) のことだと云はれてゐる。無論かゝる見解は想像に過ぎない。詩人自身もこのマントラ (Mantra 讚歌) は彼等自身の述作なることを屢々暗示してゐる。

斯く超自然的に眼と耳とから受け納れられるこの聖智は文字には書かれないで正しく聖智の受納者たるべき彼等リシ達に依つて口誦言々相反覆以て師資傳持されたのである。だから世人はこれ等のリシ達を婆羅門 (Brahmans) 換言せば聖語と祈禱との倉庫だと呼んでゐる。

私共はクーラン (Kuran) の起源を説明することに於いて巧みであつたムハメッド (Muhammad) のそれよりもつと崇高な靈感説を茲に持つてゐることを注意せねばならぬ。又私共は外的超自然的天啓が印度教のドン底に横はつてゐて而かもそれが全印度教系に滲み渡つてゐることをも注意せなければならぬ。しかし此の天啓思想は最初は成文のものでもなければ書物になつてゐたものでもなかつた。尤も啓示

された智識は最後には記述されたが、この時でも尙ほそれを讀むといふことは獎勵されなかつたことは事實である。

**三つの天啓録**　だから、私共は印度教の叙述をするのには、先づその第一歩として吠陀の内容を幾分心得て置く必要がある。私其は其論據を明了にするために、吠陀を分けて次の三種とする。その三つは各々其趣を異にしてゐるけれども、共に *Stuti* (天啓)といふ一元に還元される。

一、曼怛羅 (Mantra) —— これは經典や律語體の讚歌に現はれたる祭詞や呪文である。

二、梵書 (Brahmana) —— それは散文で書かれたる儀式の規定や説明である。

三、奥義書 (Upanishad) —— これは上の梵書を増補したもので、多くは散文體ではあるが、所々詩で記述された靈妙深秘の教説である。

**曼怛羅**　先づ第一にマントラから始める。マントラは文字通りに言はゞ思想を傳達する道具といふことだが、まづ聖者とか聖典を意味するものと見てよからう。普通は祭詞(禱詞)やさては讚歌といふ意味に用ひられてゐるこのマントラは、自然力の神格化を讚頌せるもので、後世五集録 (*Samhita*) に整理された。この讚歌の中には分離以前のアーリヤ民族固有のものもあるが、その多くは大印度民族の一部が最後に

五河地方及び北方印度に定住してから後に蒐集し相傳されたものと推せらる。

### 吠陀文學の成立年代

一體梵文學なるものは殆んど各方面の智識を包括して

あるが、或る部分は全く不完全である。即ちその歴史的記録に至つては全々信用するに足るものがない。だから、古代印度の著作家の生涯の如きは云はずもがな、その著名なる著書の年代すら確實に決定することが出來ない。然し、最も古代の作物と最近世のそれとを比較對照し、又時代の推移が如何にその文體と慣用語との變化を齎らすかを考察すれば略々間違のない公平な時代の推定が出來るであらう。かゝる方法で吠陀の讚歌が恐らく西曆紀元前一千五百年乃至一千年間に隨時輩出した詩聖達に依て作成されたものであらうと推定しても敢へて誤謬はあるまい。

### 吠陀文學の價值

假令、その詩的價值が不平等であり、又それが如何にも長たら

しい反覆と稚氣とを持つてゐるとは云ひ餘、太古印度人の宗教的概念の幾分を傳へ且つ印度アーリヤ民族の太古史と社會狀態とに光を放げるものであるから、吠陀は非常に興趣もあり且つ重要なものでもある。

### 梨俱吠陀

さて此の吠陀の讚歌は五つの重要な本集 (Samhita) から成立して

ゐる。即ちそれは梨俱 (Rig) と夜柔 (Yajus) ——これにはタイテイリーヤ派 (Taittiriya) とア

ーシヤサネーヤ(Vajasaneyin)の二本集を含んでゐる——と沙磨(Saman)と阿闍婆(Atharvam)との五つである。その中で、梨俱吠陀(Rig or Rig-Veda)の本集は最も古い最も重要なもので壹千拾七種の詩篇から出来てゐる。而してそれは人格化した自然を歌つた詩句を集成したもので、何等儀式上の目的のために作られたものではない。その讚歌の大部分はアーリヤ民族の祖先が印度に定住する以前に謳つてゐたものであるかもしれない。

**阿闍婆吠陀**　次に阿闍婆吠陀は一般に最も新らしいと考へられてゐるもので又恐らく最も興味津々たる集録であらう。この讚歌の一部分の如きは梨俱吠陀の中のそれを反覆してゐるに過ぎないものもあるけれども別箇獨創の本集と呼ばるべき價値はある。この吠陀の起源は惡神の威力に對する迷信の發達にあるので、その詩頌には梨俱吠陀から採つたものもあるが、今日では呪咀降伏や息災開運の魔術的呪法として用ひられてゐる。

**夜柔吠陀**　所謂二個の本集即ち夜柔吠陀——その二つと云ふのはタイテイリヤ本典とブーシヤサネーヤ本典とである、換言すれば黑夜柔吠陀と白夜柔吠陀とである——は大部分梨俱吠陀から採り納れたもので、純祭式用の聖典である。これよ

り先き既に供儀(祭式)の組織は出来てゐたが、餘り錯綜複雑してゐるところから、必要に迫られて遂に出来上つたものなのである。

**沙磨吠陀**　沙磨吠陀も亦た梨俱吠陀の焼き直しに過ぎない。恰かもかの夜柔吠

陀が祭式僧(Adhvaryu)用のために作られたと同じやうに、この吠陀は詠歌僧(Udgātis)用として蘇摩(Soma)祭のために變調されたものである。そうして、此吠陀の第九卷(Mandala)から採り來つたものである。

**自然崇拜(Physiolatry)**　然らば吠陀の詩人は如何なる神々に對して祈禱を捧げ讚

歌を誦せしか——これは興味のある質問である。といふのは、これ等の神々は恐らく吾々アーリヤ人の祖先がその原始的郷土たる中央亞細亞の高原の何處かで崇拜して居つたその神々と同じ名稱であつたらしいから。此の應答はかうである。彼等は日月星辰等の物理的勢力を崇拜した。少くとも自然の風光に浴してゐるものならば、どんな國民でも人智の幼稚な時代にあつては自からその自然力の前に平身低頭せないものはない。否、文化の進んだ國民でさへもこの自然力に面すれば崇拜しないまでも必ず畏敬の念の餘り低頭せずには居られないものである。結局彼等の宗教は自然崇拜(Physiolatry)と呼ぶべきものである。

## 印度人と自然崇拜との關係

亞細亞洲を本國としたアーリヤ人種の祖先達が

神の力を自然の方の中に認めて居つたことは到底今日の吾々西洋人が想像もつかぬところである。その土地や家屋や人々や乃至禽獸などが風や火や水の恵みを受けたことは西洋のそれよりはズット餘計であつた。殊にこの地方では、太陽の光線は歐洲諸國の何づれもが全く經驗することの出来ない威力を持つてゐたのである。だから此等の自然力が異つた様式で顯はれた一神の具體的表示か、さなくば、互に相對峙して優越を競える神々の具體的表示かであると考へられたことは別に不思議でもない。

又その偉大なる自然力はその當初は詩的に人格化されるが時代の經過と共に種の形相や屬性個性がそれに結び付くと一定の神々として崇拜せらるゝに至るといふことも怪しむに足らない。猶ほ又印度獨特の大氣的影響のために特殊の各地方が損害を被つたり或は四季の交代と共に各統治者がこれに對して祈願し哀願せざるを得ないところから種々の優越と尊重とが各神化力——空氣、雨、風、太陽、又は火——に對して與へられなければならなかつたことは固より理の當然である。これが吠陀聖典に顯はれたる宗教であつた。而してそれは恐らく西曆紀元前約千二三百年代

の印度ア、リヤ民族の原始的信條であつたらう。

### 神格化せられたる自然力

蓋し最初に神格化せられた自然力は天空界のそれ等であつたらしい。ところで、これ等は最初は簡明といふよりも寧ろ漠然たる人格化の下に概括されたことである。尤もこれは宗教的觀念を構成するための最初の試みとしては自然の成り行きである。吠陀にありては此の統一は間もなく分離して種々の枝葉を生じた。唯讚歌の幾くらかゞ、唯一神聖自存の實體に就いての簡単な概念を謳つてゐるやうである。しかも、その僅かな讚歌でさへも全宇宙に唯一神が嚴存するてふ概念は尙ほ朦朧として徹底味を缺いてゐるのである。

### 吠陀の讚歌に現はれたる主要なる神々

思ふに太古の優麗なる神格はドウヤ

ス (Dyaus) であつたらう。希臘語のツォイヌ (Zeus) 羅馬のヂュピテル (Jupiter) と同語で、天父 (Dyaush-piter) 卽ち大空を意味する。後世諸神の母であるところ考へられた女神阿提綴、阿爾底ダイ、デア、ディ Aditi)——無限の擴がり——を意味する——が間もなくドヤウスと結び付き次いで婆樓那 (Varuna)——蒼空を意味する——といふ同じ概念が發展した。その婆樓那は古代波斯の神話のオルマズド (Ormazd) 卽ちアフラマズダ (Ahura Mazda) に相當せるもので、又希臘のウラノース (Uranos) にも似てゐるが、これよりもズット精神的概



念である。此婆樓那も亦間もなくミトラ (Mitra)——波斯の *Mithra* と同じである——といふ他の漠然たる人格化即ち日の神たる太陽と結び付けられて考へらるゝに至つた。

爾來、是れ等天體の人格化は餘り漠然としてゐて一般人類の宗教的觀念の發達に適應せないやうに感せられたので、間もなくこの廣大無邊の蒼空は各々力と屬性とを有する個々獨立の宇宙的實體に分解された。その一つは濕氣で、これは人格化されて因陀羅 (Indra) と呼ばれ常にヴリトラ (Vritra) といふ惡魔即ち濕氣の反對力のために邪魔されてゐるが、而かも絶えず露てふ寶物を雨降らさんことを望んで止まないのである。今一つは風である。これはグーユ (Vayu) と呼ぶ一神格として將た又周圍の各地方から集り來る動力の集合體の人格化即ちマルツ (Maruts)——嵐の神——として考へられてゐる。これと同時に今迄の純天上界の婆樓那はアディトヤス (Adityas) アディテイ屬——アディテイ女神の子とせらるゝ神々——後世増加して十二となり一年十二の各月に變化する太陽の諸種相と考へられた——と呼ばれる七つの第二次的神格の一つに下り、後この七神が天界を去つて地上に來るや水神に成り下るに至つた。以上個々別々に神格化された物理的勢力の中で最も人氣のあつた崇拜の對象

は雨と露とを生ずると想像された神であつた。

### 人氣を集めた吠陀の神々

抑々因陀羅は原始印度神話中のヂユピテル、ブルビアス (Jupiter Pluvius) である。若し單に彼を謳つた祈禱讚歌の數丈だけで彼が優越を表明し得らるゝものとすれば、彼は少くとも吠陀崇拜者が渴仰する主要なる神體であつた。ところが、熱の助けなくしてどうして雨を生じ得やう——蓋し激烈な熱の力は印度の人心に畏怖の念を刻みつけねば置かなかつたであらう。

茲に於いて吠陀崇拜者の第二の偉大なる神で、しかも供犠の儀式に關する最も重要なる神は、阿耆尼 (Agni)——ラテン語ではイグニ Igni である——即ち火の神である。熱と發生と成長との源泉であると假定されて、あらゆる異教體系中第一最要の神と一般に考へられてゐる蘇利耶 (Surya) 即ち太陽——希臘のヘーリオス (Helios) にあたる——でさへも往々にして電光と同じく火の別體と見做されることがあつた。即ち地上の火、天上の太陽、雲間の電光は火の別體と見做されたのである。斯くの如く因陀羅、阿耆尼、蘇利耶の三つは吠陀の鼎足的三神を形成してゐるのである。

この外に烏舍 (Ushas) といふ曉の女神がある。これは希臘のヘーオス (Heos) に相當する。本來は太陽に附屬したもので、天空の娘と考へられてゐる。

尙ほ茲に二つの神がある。アシユウイン (Asvins) がそれである。傳ふる所に依ると彼は太陽の二雙子、——太陽の妻たるアシユヰニー (Asvini) が産む所である——で常に若く美しく、曉の女神烏舍の先達として黄金の車に乗つて天空の旅に出ると考へられてゐる。時にダスラス (Dasras) と呼ばれて聖醫即ち病氣の破壊者と考へられ、時にナーサタイアス (Nisatyas) と呼ばれて「不眞實ならざる者」と尊ばれてゐる。

思ふにアシユウインは曉に先立つと想像されてゐる光輝燦然たる二點或は二線の人格化であつたのであらう。

(私註) 高楠、木村二氏の高著「印度宗教哲學史」九八頁にも疑問として殘されてゐるやうにアシユウインが朝の光明現象の人格化であることは容易に想像することが出来るが、その雙生は何等を意味するのか明了でない。今茲にウイリアム氏がアシユウインを二點又は二線の人格化だと云つてゐるのも無論氏獨特の想像説に過ぎないのである。

茲に一言して置かねばならぬのは此の地球がブリテイウイー (Prithivi) ——これは「廣大なもの」といふ意味である——の名の下に萬有の母だと考へられて、吠陀の原始的女神としての光榮に浴してゐるといふことである。加之、種々の神體は地とドヤウス即ち天との空想的合一から生れた成果だと考へられた。丁度後世の神話が多く自然界の男女両性の想像的混交から説明されるやうに。然し、宗教的崇拜が利己的性質を増すにつれて、地球は比較的人間の支配を受けることが明了になり、而して比較的

不確實である空氣や火や水の如きは火急に贖罪を要しないやうに考へられたものだから、自然その重大性を失ひ祈禱讚歌に於いても嘆えられることが少なくなつたことは大いに注目すべき事である。

上述の吠陀諸神に加ふるに、耶摩(Yama)——初めは死者の靈魂を支配する神であつたが後には死者の裁判官となつた——の名を以てすれば吠陀の讚歌曼怛羅の頌せる主要なる神々は記述し盡されることゝなる。(つゞく)

## 人種問題と浄土教徒

石井 教道

—

大正八年六月、巴里に於て媾和會議の開かるゝや、我國代表者は、幾多問題の中から人種平等案なるものを提出したが、重大問題として後日附議さるべく延期せられ、昨年十一月、ゼネバに於て國際聯盟會議の第一大會の開催せらるゝ報の傳はるや、日本代表者が再び人種平等案を提出するや否や、而して其結果如何は、頗る興味ある問題として世界各國の視聽を惹いた。然し此れも亦周圍の事情に鑒み、適當なる機會を